shake on!

Love Live! Girls love Anthology

shake on!

Love Live! Girls love Anthology

R18 Adult Only

01 北村透／穂乃果×にこ 6
02 ぶん／絵里×ことり 24
03 秋太郎／真姫×花陽 49
04 抹茶リトロ／海未×ことり 71
05 相原／絵里×ことり 81

Shake out!

北村 透 / 穂乃果×にこ

Kitamura Toru/Honoka×Niko

おはよう　寝坊助
くくくっ
ぷぁっ…
あれ～にこちゃんだ～…
きたむらとおる
～半同棲にトキメキを覚えるはずがっているだろうか～
ペタペタ
おはよ～いつ来たの？
ついさっき
アンタ電話しても出ないから鍵使ったわよ
ねぇねぇ！なに作ってるの？
ヒョイッ
こ、この材料は…！
ホットケーキだぁ！
わふわふ
86

シェフ！ふかふか二段にしてください！

ハイハイ

トロッ…

それなぁに？

なぁになぁに

近っ

いいにおひ…

これは溶かしバターとみりん

チャッチャッチャッ

へぇ…

これ入れたほうがおいしいのよねー

これ食べたら買い物いくわよ
しばらくのおかず作り置いといてあげるから
クンカクンカ
カチャカチャ
ピカーン
ほ
プロポーズ
あと―
ガシャッ―
!?
ア!
ンタねぇ・・・
すぐそういうことを・・・
にこちゃんいいにおいがする
はぁ?

美味しそう♡

ちゅー

すっごく嫌な予感がするわ！

ふっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ ちゅっ

ちょっ

こらっ やめ

ちゅっ

ちゅ
ちゅ
この展開はまずい・・・！
このままでは・・・
くっ・・・!!

ん！

モミモミ
するり

穂乃果ぁ
ふふふ
もーみもーみ

んー
興奮するね！
えへ
プチプチプチプチ
さりげなくボタン外してんじゃないわよ！
まぁまぁ
ぐいっ
あっ

もうホントしぃ

(すっ)

ぎゅっ

ばっかぁ…

(ふっ)

(んはっ)

くい

ガタッ

あっ

ふにふに

にこちゃん

こっちおいで？

ど
なんでエプロンだけ残してるのよ！
ムフーン
フンスフンス!!
ことりちゃんに借りた漫画に描いてあったんだよ！
ロマンなんだよ!!
そこの幼馴染なんでそんな漫画読んでんのよ！

ひゃう
ぐいぐい
ちゅ♡
にこちゃん
もう結構濡れてるね
うう
うっっっさい！
しゃべるな！
あむ
あむ
こっち
もう触っちゃうね
ふーふーん♡

くちゅ
くちゅ
ちゅ・ちゅっ
ふぅ
ちゅ

くちゅ…
ちゅぷ
あっ

ぐぐぐり
ぢゅぷっ
ふぅ
ん

オネガイ…
ね
にこちゃんの声聞きたいな
ふっ
んっ

……だったら

前からしてよ
うしろやだ

ギューッ!!!

はい♡

よいしょっと

うーん
にこちゃん
すごくいやらしいね♥

ハァ…

あうち
ぺしっ

って、
誰のせいよ

わたしです
私以外はダメだよ？

もー
バカなの？

ぐっ…
くちゅ、
ふ
ウッ…
ぷぷぷぷ
だいじょうぶ？
ハッ
にこちゃん息止めちゃダメだよ
ぽんぽん
深呼吸してゆっくりゆっくり
欲望に忠実なくせにこういうとこは優しいのよね…

穂乃果

ちゅう

ん

別に嫌いじゃないけどね

ハッ

まったく…

こんなことさせるのアンタだけよ

に

にーちゃんん♥

わぁっ

ここらっ

イキキリ…

ーッ

ーッ

ーッ

ぷるぷる

ぷるぷる

ちゅぷちゅぷ

ぐちゅっ

あッ

ズッ

ズッ

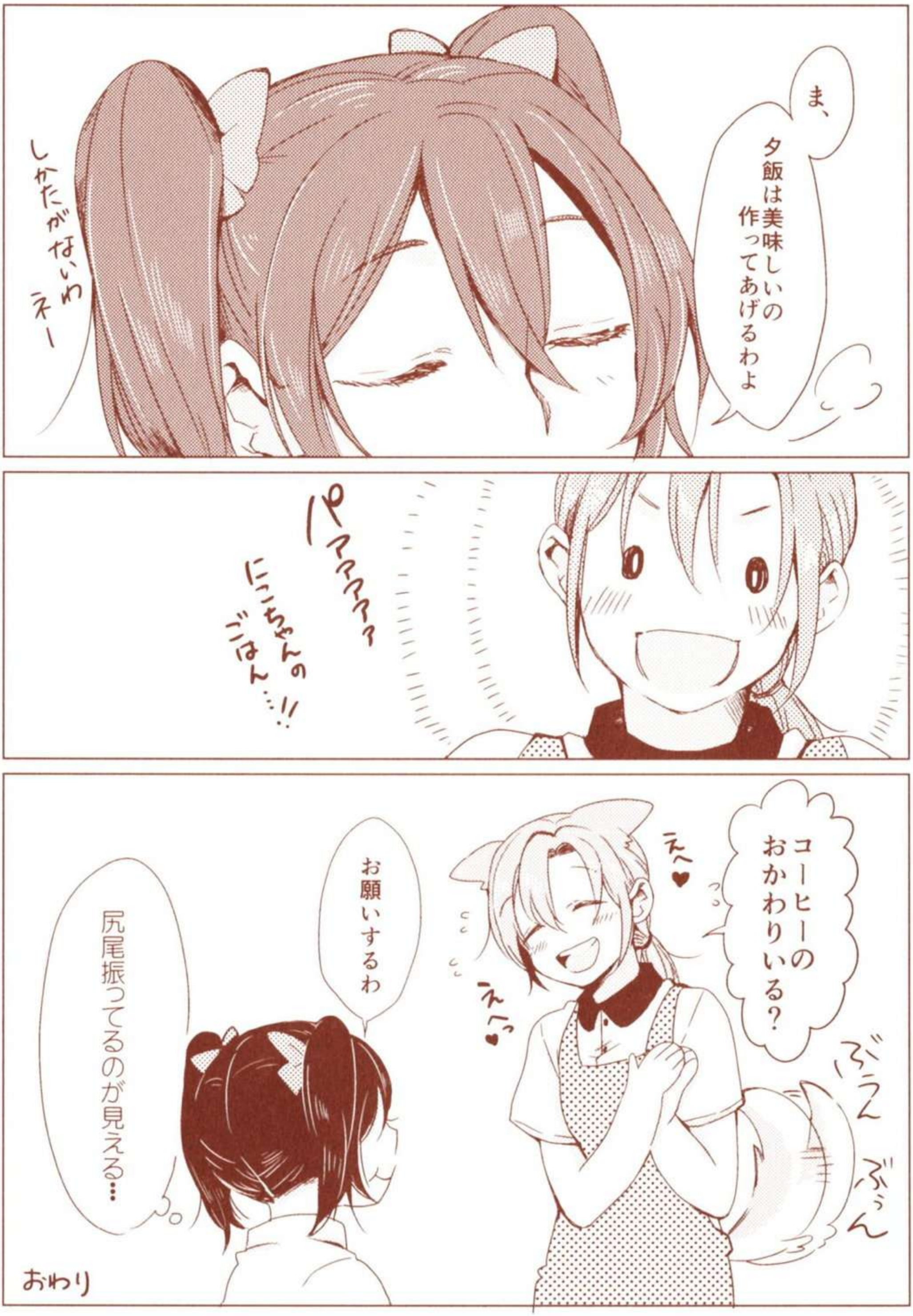
んっ…ッ

あっ

あッッッ…!!!
ビクンッッ
はぁ
はぁ
はぁ
ぴちゃ
にこちゃんもっかい
ぎっ
ぎっ
ちょ！待って！
せめて休ませて
ごめん待てない
わ

お嬢さま
お味はいかがでございましょう…？

まぁまぁね
もぐもぐ
ありがとうございますぅ!!


ま、夕飯は美味しいの作ってあげるわよ
しかたがないわネー
ppppp
にーちゃんのごはん…!!
コーヒーのおかわりいる？
えへへ♥
えへっ♥
ぶうん ぶうん
お願いするわ
尻尾振ってるのが見える…
おわり

ぶん / 絵里×ことり

Bun/ErixKotori

大学生になって絵里は一人暮らしを始めていた。実家から何駅か離れただけだが、大学までの通学が格段に楽で1Kのマンションは狭いながらにも快適な生活を送っている。

一人で暮らし始めてから半年が過ぎ、そろそろアルバイトを始めようかと思えるほどに余裕ができた。

そんなある日のことだ。

土曜の昼間に絵里がアルバイトの求人誌を読んでいるとインターホンが鳴った。

宅配便でも来たのだろうか。インターホンのモニターを見ると、映ったのはことりだった。

連絡もなく部屋に来るのは珍しい。いつもは何かしら連絡があるのに。

すぐに玄関へ向かってドアを開けた。

「どうしたの？いきなり来るなんて珍しい……」

「……」

玄関の前に立つことりは俯き加減で表情が読めない。

「とりあえず入って」

部屋に入れるとドアが閉まると同時に抱きつかれた。

「ちょっと、どうしたのよ」

戸惑いながらも絵里は抱きとめ、玄関に鍵をかける。部屋の中とはいえこんな風にいきなり抱きついてくるのは珍しい。よほど切羽詰っているらしい。

「あのね、絵里ちゃんお願いがあるんだけど……」

「ん？」

「留学先でレイプされたとき痛かったら嫌だからことりの処女奪ってぇぇ！」

「ハァー！？」

急な展開に絵里は素っ頓狂な声を上げた。

何がなんだか分からなかったが、とにかくひどい休日になるということは予想がついた。

◇

玄関でとんでもないことを言い出したことりをなんとか引き剥がし、部屋に入れて落ち着かせると絵里は溜息を一つ吐いた。

とりあえず、なぜあんなことを言い出したのか理由を聞くことにする。

「何かあったの？」

「……」

黙りこんでしまうことりに、どうしたものかと顎に手をやる。

「いきなりあんなこと言われても、私どうにもできないわよ」

道具を使えとでも言うのだろうか。そんなのはごめんだ。処女を奪ってと言ったが、絵里とことりはもう性行為を何度もしてきた。それなのに、どうして。

「ことり、女性同士だったら処女奪ったことにはならないの？」

「どうなんだろうね？」

「いや、聞いてるのはこっちなんだけど」

ことりは首を傾げるだけで答えてはくれない。どうしたも

のか……。
処女の定義を調べてみた方がいいのだろうか。
「あのね絵里ちゃん。ことりはね、男性のものを入れられ時に痛かったらやだっていうだけなの」
「……」
どうしていきなりその発想に至ったのかがわからないのだけれど、と絵里が言えないまま話は続く。
「初めては痛いって聞くから」
「そうね、指でも痛がってたものね」
初めて抱いたときのことを思い出した。指を入れたときにことりが痛がって慌てたりしたなって、少しだけ懐かしい気持ちになる。
「だから、痛いんなら絵里ちゃんにされるほうがいいなって」
「……？」
疑問符しか浮かばなかった。
自分は女性であって男性ではない。もちろん男性器もないわけで、つまりはそういう道具を使わなければことりが望むことはできないだろう。
「……道具使ってセックスしたいってこと？」
「ううん」
「どういうこと？」
「あれ？」
「ん？」
会話がどうにも噛み合わない。
絵里が重要なことを聞き逃したのか、ことりが隠しているのか、話の核心が全く見えなかった。

「もしかして、絵里ちゃんついてないの？」
「あるわけ無いでしょおおお！」
当たり前のことを言われて激しくツッコミを入れた。ことりは一体、自分をなんだと思っているのか。たまにふわふわした会話をすることはあるが、今回はふわふわどころではない。相手は未成年だが酔っ払っている可能性すら考えてしまう。
何をどう言えばいいのか分からず頭を抱える絵里を、ことりは探るように見てくる。
「あれ？まだなのかな……？」
「何の話よ！」
「こっちの話だから気にしないで」
「気にするわよ！」
目を逸らしたことりの頬を逃がすまいと、絵里が両手で包む。いや、思い切り掴んだ。
「説明しなさい」
「……どうしてもしないと」
「ダメに決まってるでしょ」
いつもの曖昧な笑顔でことりは言うが、今回ばかりは流されるわけにも行かない。絵里は断固としてことりから視線を外さなかった。
「……」
「……」
数秒間のにらみ合いの末、ことりが折れた。
「えっとね、実はね」
ことり曰く、絵里に何とか男性器的なものを入れてもらう

にはどうすればいいかと知人に相談したところ、大人のオモチャよりもおもしろいものがある。と譲ってもらった粉末があるそうだ。

「それ、ドラッグとかじゃないわよね？」

「違うよ！そんな危ないものじゃない。効果が出なかったらただのビタミン剤みたいな　ものでも身体に悪影響は無いって言ってた」

絵里はその話を信用しかねる。ことりの知人という時点では信用できる気がするが、そんなわけのわからないものを渡すなんてどうかしている。

「それでその効果は？」

「効果はね、その、えっと、お……うん、どう言えば……」

歯切れが悪い。しかしさっきの会話でなんとなく効果はわかってくる。それでも信じたくない。

「ペニスが生えます」

「ブッ！」

そんな単語、保健体育の授業以外で聞くことなんてなかったから思わず噴き出した。

「効果が出る人の方が少ないからあんまり期待しないでって」

とんでもないものを飲まされるところだったらしい。

いや、それだと先ほどの噛み合わない会話がさらに噛み合わないことになる。

疑問点がいくつか浮かんだがそれを追求する前にことりが鞄から怪しい粉末の入ったビンを取り出した。

「こちらの粉末がその効果を得させてくれます」

「……飲むと思う？」

「思わない」

マグカップ程度の大きさのビンに三割ほど入っている粉はコショウのような色をしていた。味がするのかはわからないけれど、溶けたりしたら食べ物に混ぜられたらわからないだろう。一服盛る前に言ってくれてよかった。

しかし何から突っ込めばいいのか。会話の何もかもがおかしかった。

まず、レイプされたとき痛いの嫌だから、男性器を生やしてセックスしてほしいというその発想からしておかしい。女同士で付き合っているのに、それを相手に求めるのもどうかと思う。

そして男性器を生やせるわけのわからない粉末を手に入れたというのだからさらに恐ろしい。

しかもその粉末は身体に悪影響を及ぼさないというのだから都合が良すぎて恐ろしさは倍増した。

「……もう、どこからつっこめばいいの……？」

「ことりね、クッキーを焼いてきたから。とりあえずそれ食べて落ち着こう？」

いそいそとことりが鞄から包みを出した。

「……」

絵里の視線がクッキーとことりを何度も往復する。

いくら彼女の手作りでも、あからさまに怪しいそのクッキーをほいほい食べるほど絵里は馬鹿ではない。

「この状況で食べると思う？」

「クッキーにはこの粉入れてないから安心してほしいな」

そう言ってことりは包みから出したクッキーを一枚食べた。
何も怪しいものは入っていないと証明するように。
そこまでされては信用するしかない。小さく溜息を吐くと絵里は立ち上がった。
「……お茶……入れてくるわね」

◇

「……」
「……」
お互い無言だった。
ことりを見ると紅茶の入ったマグカップを持ちながらそわそわしている。今日は落ち着きがない。マイペースなことりにしては珍しい。
絵里はあんなことを言い出したことりに何を話せばいいのかわからない。説得するべきだろうか。いったい何をどう説得すればいいのかもわからない。
黙々とクッキーを咀嚼しながら絵里は考え込む。
もっと自分を大事にするべきだと言ってあげるべきか。そもそも怪しい粉末を飲む勇気が無い。
ことりの留学先は、そんなにも物騒なところなのだろうか。
絵里はまさか「レイプ」だなんて物騒な単語が出るとは思っても見なかった。
彼女の母親がそんな物騒なところに娘を留学させるわけが無いと思うが、引き止めるべきなのだろうか。穂乃果が去年そうしたように。

「……」
そんなこと、自分にできるのだろうか。
「絵里ちゃん」
ことりの呼びかけに絵里は顔を上げた。いつも通りのことりがいる。
いつも通りちょっと何を考えているかわからない。
「クッキーへんな味しないでしょ？」
「うん。おいしい」
本当にクッキーには何も盛られていないらしく、絵里は安心して一息つき、紅茶をすする。
絵里の好みに合わせて作ってくれたのかチョコチップが入っていた。
「それにあの粉、飲んですぐには効果出ないんだって」
「そう」
だからまず了承を得てから実行しようと思って来たのかもしれない。
なんだかんだで常識的というか不意打ちをしない子だったなと、絵里はことりを疑った自分を少し反省した。
しかし、引っかかるところがある。何かおかしい。
先ほどの会話と矛盾を感じた。
落ち着いたので一度、会話内容を整理したい。
「だからね」
「うん」
とりあえず話は聞いてあげよう、と再び紅茶を口に含んだ。
「先月からこの部屋の食べ物とか飲み物とか調味料全部に混ぜていったの」

「ブァァァァァァ！」
絵里が盛大に紅茶を噴出した。
汚いと思ったがもうそんなことに構っている場合ではない。
前月から、この部屋にある食べ物関係全てに、あの粉末を盛った？そんな、馬鹿な。
「それ一服盛ったとかいうレベルじゃないわよ！」
ありえない策略に絵里は声を荒げる。
毎日その怪しい粉の入ったものを食べていたという事実に血の気が引き、吐き気すら込み上げてくる。
「絵里ちゃん顔色悪いよ？」
「そりゃそうでしょ！」
「もう消化されて身体に蓄積されてるから吐いてもどうにもならないよ？」
「そうでしょうね！」
血の気が引く中、声を荒げてしまい目が回る。
このひと月の間に何度白炊し、何度食事をしただろうか。
健康面に気を遣って習慣のように白炊してきたのがこのときばかりは仇になった。
まさか調味料にまで盛られているなんて。
そういえば、と思い返す。
ことりはこのひと月の間、絵里の部屋で食事を取っていなかった気がする。たまに遊びに来てもほとんど泊まることはなかった。生徒会の活動や、部活でまた衣装を作ったりして忙しいのだと思い込んでいた。
しかし、しかしだ。
誰がこんなものを盛られていると予想できるだろうか。

そして誰がこんなものをことりに渡したというのか。聞き出してどうにかなるとは思わないが聞かなければならない。
もしかしたらどうにかできるかもしれない。
「誰にそんな粉もらったのよ！知人って誰よ！」
「希ちゃん」
「希イイイ！」
なんとなく予想した答えだったからか、迷い無く親友の名前を叫んでいた。
「って言うと思った？」
「違うの？」
絵里の表情が驚愕に変わる。他にこんなものを出す人が予想できない。
「希ちゃん信用無いなぁ」
「こんなわけのわからないもの出す人他にいないでしょ？」
「いやいや、なんだかんだで常識的な人だよ？アニメでも変なもの出してこなかったでしょ？」
「メタ発言はやめなさい！」
「それに絵里ちゃんの知ってる人とは限らないよ？」
「それはそうだけど……どんな知り合いよ……」
正直なところ絵里にはわからない。ことりの友好関係の全部を知っているわけではないし、それよりも男性器を生やすにはどうしたらいいかなんて相談できる相手がいることが驚きだ。絵里にはそんなこと相談する相手はいない……、いや希になら相談しそうだ。
「まあ、にこちゃんなんだけどね」
「私の知ってる人じゃない！」

ことりにこんなとんでもない粉を渡して、一体どういうつもりか問いただしてやろうとスマートフォンを取り出した途端、意図を察してことりが飛びついてきた。

「待って絵里ちゃん」

「待てるわけ無いでしょう！」

「呼び出してお説教でもする気なの？」

「文句のひとつぐらい言ってもバチは当たらないと思うけど！」

そうだ、文句のひとつぐらい言っても問題は無いだろう。

しかしことりは必死に絵里を止めてくる。

「にこちゃんは悪くないの！」

「……」

電話をするのは聞いてみてからでも遅くはないだろうと思い、絵里は少し落ち着こうとした。

「にこちゃんに相談したら希ちゃんが何とかして手に入れてくれたの！」

「やっぱり希が一枚噛んでるんじゃない！説教する対象が増えたわあがが！」

ことりが口に無理矢理クッキーを詰め込んできた。クッキーにもがいている隙を突かれてスマートフォンは奪われ、無常にもスマートフォンは投げ捨てられた。壁にぶつかり悲惨な音を立てた絵里のスマートフォンはテレビの裏へと落下。機種変更したばかりだったのに……と、絵里の目から光が消えた。

「ことりがにこちゃんにどうしてもって言って」

「……」

スマートフォンの悲惨な末路に目もくれずことりは説明を続ける。絵里は口いっぱいに詰め込まれたクッキーを死んだ目で咀嚼していた。

「条件として誰に使うのかは教えないといけなくて……」

話をほとんど聞き流しながら絵里は紅茶でクッキーを流し込む。クッキーを詰め込まれたせいかやたらと口の中が乾いていた。大きな声を出したせいか、少し暑い。

「それで絵里ちゃんって答えたら」

「答えたら？」

「爆笑しながらオッケーって」

「はいアウトォ！」

叫びながら絵里は頭を抱えた。爆笑するにこの姿が簡単に想像できる。今度ひどい仕返しをしなければならない。

「高校時代は友人に恵まれたと思ったのに……」

「絵里ちゃん友達少なそうだもんね……」

哀れみをふんだんに含んだ視線を向けられる。

「余計なお世話よ……」

そう言って絵里は項垂れた。

◇

「あぁもう……」

絵里は溜息を吐く。わけのわからない状況に絵里は頭を抱えた。

「溜息吐くと幸せが逃げちゃうよ？」

誰のせいだと思ったがあえて何も言わなかった。突っ込み

疲れたせいかやけに暑い。
何か、おかしい。
「そろそろだと思ったんだけどな」
身体を摺り寄せてことりがつぶやく。
いつもなら抱きしめてしまいそうな仕草だったけれど、今日はとてもそんな気分にはならない。
「絵里ちゃん」
ことりの指がみぞおちの辺りからすっと線を引くようにへその下あたりまでを撫でた。
「……っ」
ぞわぞわと背筋に這い上がる何か。
いつもなら興奮だ。誘われているのだと思いスキンシップをとろうとするが今日は何かが違う。
やはり何か変だ。しかし、違和感の正体がわからない。
「あのね、絵里ちゃん」
申し訳なさそうに名前を呼ばれる。
まだ何かあるのかと絵里の表情が強張った。
「あの粉、ね。クッキーには入れて無いから。ほんとだから」
「それは信用してる」
目の前で食べていたのだから信用するしかない。嘘はいわない子だと思っている。絵里もクッキーを口に運ぶ。
「その代わりにクッキーには興奮剤みたいなのは入れたから」
「ちょおおっとおおおお！」
絵里が叫ぶ。
とんでもない女だと思った。チョコチップが入っていた理由もわかった。何でもいいから摂取させるというその手段の選ばなさが恐ろしい。
「なんでそんなの入れてんの！」
「だって、たたなかったら絵里ちゃん自信喪失するかと思って」
「何の自信！？」
「あとね」
「まだあるの？」
絵里が両手で顔を覆った。正直、これ以上何も聞きたくない。聞いたら突っ込まなければならないし、今でも突っ込みが間に合っていないので勘弁してほしかった。
「さっき出したときこのビンの蓋空いてて……中身鞄の中に撒き散らしてたから、クッキーにもかかってるかも」
「ちょっと！ことりもクッキー食べてたわよね？」
「ま、まぁちょっとぐらい大丈夫かな……」
楽観的なことを言うがことりの表情が気まずく強張る。
「は、吐きなさい！今ならまだ間に合うから！」
「絵里ちゃんは優しいね。こんな状態でもことりのこと気遣ってくれて」
「いやその……」
そういうわけではない。これであの粉末がうっかり効果を発揮したらことりにも生えてしまうのだ。
男性器があろうが無かろうがことりはことりだが、そんなものはできれば見たくない。
「絵里ちゃん」
急に甘ったるい声で呼ばれて絵里の動きがぎくりと止まる。

これは誘ってくるときの声だ。
「ダメよ」
こんな状況で何をしようというのか。ことりはそれが目的かもしれないが、絵里は納得できないことが多い。
這うように迫ってくることりから逃げようと絵里が後退するが、すぐベッドに背中が当たり、追い詰められる。この瞬間ばかりは部屋の狭さを恨んだ。
目の前に迫ることりを蹴り倒すわけにもいかず、絵里はことりの指まってしまう。ことりの指先がジーンズのボタンを外す。
「絵里ちゃん、もうわかってるんでしょ？」
「！」
恐れなのか期待なのかわからないまま、絵里はことりの指がファスナーを下ろしていくのを見ているしかできなかった。
ジッパーが下ろされていく感触がやけに生々しく感じる。もう自分の身体に変化が起きていることなんてとっくにわかっていた。
「待って」
制止の声を聞かずことりは迷わずファスナーを下ろした。
下着を押し上げるものがある。こんなもの、あるはずが無い。あってはならない。絵里は女性なのだから。
それにしてもレースのついた女性ものの下着が押し上げられるのは、非常に不思議な光景だ。どこか変態的で絵里は泣きそうになった。
「クッキーの効果出てるね。もう大きくなってる」
「待って。お願いだから待って」
「もう待てないかも」

足を閉じれないようにことりが身体を割り込ませてくる。そのまま四つん這いになって顔を近づけてくる。軽く唇が触れ合った。
いつもなら嬉しいはずなのに、今回ばかりは少し怖い。キスなんてされたら変にスイッチが入ってしまう。
「あのね、穂乃果ちゃんと海未ちゃんとでも迷ったんだけどね、やっぱりこんなことと絵里ちゃんにしか頼めないもん」
「ちょっと、なんでそこで迷うのよ」
「だって、絵里ちゃんこんなことしたら泣いちゃうかもって」
「あ、一応そのあたりに気を遣ってはくれたのね」
実際に手を下したわけだが、そこを突っ込んだら余計なことで傷つきそうで絵里は何も言わなかった。
「だからってなんで私以外に使おうとするのよ」
「二人には隠し事できない気がしたから」
真顔で言うことりに絵里はどこから突っ込めばいいのかわからず真顔になった。
いくら仲のいい幼馴染とはいえ隠していいことだってあると思うし、特にその二人には隠しておくべきなんじゃないかと絵里は思った。
穂乃果は無邪気だが部屋にあった少女マンガの量を見る限りそのあたりの話には食いついてきそうだし、物凄く騒ぎそうである。以前、恋愛ものの映画をメンバーで見たときはすぐに寝てしまったけれど性的な話になれば別だろう。あれでも年頃の女の子だ。
海未は顔を真っ赤にして「破廉恥です！」と叫ぶのが目に見える。そんな海未にもこの粉を飲ませようと考えたのだか

らことりは本当に容赦が無い。
「そのあたりで悩んでることもにこちゃんに相談したの」
絵里は溜息が出た。こんな誰にも知られたくないようなことが同級生二人には全部知られているなんて辛すぎる。
「海未ちゃんはかわいそうだから止めてって言われて、穂乃果ちゃんもめんどくさいことになりそうだから止めてって言われて……」
「仕方なく私になったの？」
「そうじゃないよ。適任だって言ってくれたよ」
「笑いながらでしょ！」
「笑ってたけど！でも！」
ことりの説明も必死な表情も今はどうだっていい。そんなことより下着の上から膨らみを撫でてくるのを止めていただきたい。
「ちょっと、待って。ことり！」
「やだ待てない」
頑固なことりは嫌だと言い始めたら絶対に止めないのを絵里は知っている。しかし、言いなりになるわけにもいかない。
「せめて心の準備をさせて！」
「じゃあ自分で出して」
「……うぅ」
結局はこうなる。結局は言いなりになってしまう。
でも、撫でられてからずっと窮屈だった。だから仕方ない。
そうやって言い訳をしながら絵里はジーンズと下着をずらした。
こんなものあってはならないのに、そう思いながらも自身に生えたペニスを取り出す。勃起し、まるで凶器のようなそれを掴むとびりびりと腰に電気のような快感が走った。
「……なんで、どうやったらこんなことになるのよ……」
眉間に皺を寄せて当然の疑問をつぶやく。
「にこちゃんはクリトリスが大きくなったようなものって思えばいいって言ってたよ」
「なんて会話してるのよ……」
年頃の女の子の会話なんてそんなものかもしれないけれど、絵里はそういう話をする相手がいないからよくわからない。にこや希相手でも、普段そんな会話はしない。
「絵里ちゃん」
ことりが切羽詰った声を出した。
「ことり、もうだめなの」
絵里の肩に手を置いてことりが跨ってくる。
「ちょっと」
「お願い」
ことりが絵里の手を取って自分のロングスカートの中に導く。
「……っ」
触らされた下着の上からでもわかる。その中がどれだけ濡れているのかが。
「いつからこんなことになってるのよ……」
「部屋に来たときからだよ？」
無言になったとき、そわそわしていたのはこういうことだったのか。
欲情しきった目のことりがキスをせがんでくる。拒むこと

もできず絵里は受け入れ、舌を絡ませる。
深く濃厚なキスは簡単に思考を奪い取っていく。唇が離れていくのを惜しんでしまう。
「絵里ちゃん、お願い。指……いれて……！」
その一言がトドメになり、絵里の思考が性欲に飲まれた。下着の中に指を入れ、秘所を撫でて溢れる愛液で指を濡らしていく。膝立ちになったことりが身体を震わせてしがみついてくる。
何も迷わずことりの中に指を二本うずめていく。熱く濡れた柔肉に咥えられて飲み込まれる。
唐突に始まったいつものセックスに絵里は生唾を飲み込んだ。
鼻から抜けるような甘ったるい声をもっと聞きたくて、擦って、押し広げて、激しく動かす。絵里の指に合わせるようにことりが腰を振りだした。
空いている手でシャツを胸の上まで捲り、露にした肌に唇を寄せ舐め上げていく。ブラジャーのホックを外すとことりに頭を抱きかかえられて胸に顔をうずめるような格好になった。
少し汗ばんだ肌は柔らかく、とてもいいにおいがした。
「は……ぁ、あ、絵里ちゃん、……もっと動かして……！」
切羽詰った声でことりがせがむ。吐息が耳に当たってくすぐったい上に、興奮する。
このまま指で疲れさせてしまえばことりの作戦は失敗に終わるのではないか。ふとそんな考えがよぎった。
しかし疲れさせたとして、この勃起したものをどうすればいいのかわからない。
それに、ここでことりを抱かなかったら後悔するかもしれないと思った。
今なら女性である自分には不可能だったことができる。そう思ってしまうと欲が出た。
気が急いた絵里は指の動きを早めた。
「あっあっ……！」
背を逸らしてことりの声が高くなる。スカートの中の様子は見えないがぐじゅぐじゅといやらしい音が聞こえてくるあたり、もう洪水のように溢れているのがわかった。
「――っや……ぁ！」
身体を震わせ高い声で鳴き、ことりが達した。
きつく咥え込む膣内から指を抜き絶頂の余韻に浸らせる間もなく、中途半端に脱がしていたことりの服を全て剥ぎ取っていく。
絵里の頭は興奮のせいでもうセックスのことしか考えられない。
生えてしまった、というか大きくなったこれを早く入れたい。それでいいのかという自分はまだ頭の片隅にいるが、その声はもう無力だ。
すべりを良くしたほうが痛くないのかもしれないと思い、先端から溢れてくる液体を、ことりの愛液で濡れた手でペニス全体に塗りたくる。ぐちぐちと淫らな音がした。
「絵里ちゃんも脱いで」
促されるままに服を全部脱ぎ捨てると、再び跨ったことりがそうっと壊れものを扱うようにペニスを掴んできた。

「ことり……？」
腰を下ろしことりは自ら自身の中に絵里をうずめていく。
「――っ！」
挿入の痛みにことりの表情が苦痛に歪む。
一方、絵里はまだ先の方しか入っていないというのに、膣内の狭さと熱と柔肉に圧迫される刺激が気持ちよくて、快感に溺れかけた声を吐き出した。
早く全部入れてしまいたい。そう思うが、痛みに耐えることりの中に無理やり押し入るのは気が引ける。
「大丈夫、夫……？」
痛みに強張る頬を撫でて様子を伺うと、涙目のことりが微笑んだ。
「……平気」
唇を軽く触れ合わせてくる。情事の最中にするにはあまりにも軽く大人しい口付けだった。
もっと深く味わいたい。そう思ったけれどことりは顔を離し、一気に腰を下ろしてきた。
「――ぁぁあっ」
「〜〜っ！」
あまりの刺激に絵里が情け無い声を上げる。ことりは痛みに声も上げられない。
指で感じるのとは全然違う圧迫感が気持ちよすぎてどうにかなりそうだった。
「……はぁ、はぁ、はぁ」
痛みを我慢しているせいかことりは眉間に皺を寄せる。しかし、絵里を見てくる視線は熱く、呼吸も荒い。

「……動くね」
絵里の返事を聞かずにことりが腰を上下にゆすり始める。
「……く……ぁ……っ」
そう簡単には痛みが取れるはずもなく、ことりが呻く。
「あ……あぁ……っ」
一方、絵里は擦れるのが気持ちよくて、情けなく声を漏らした。ゆっくりと、しかし確実にことりの動きが大きくなっていく。いやらしい音を立てながら　ペニスがことりの柔肉に扱かれていく。
「……あ……、あぁ……んっ」
慣れてきたのかことりの声が善がり声に変わる。
腰の辺りで何かが燻っていく。初めての感覚を絵里はきつく目を閉じて耐える。
何かが出そうで出ない。おそらく身体は射精したいのだろう。しかし、どうすればいいのかわからない。
「う、あぁ……や、だ……っ、ことり……」
「……はぁ、あ、う、絵里ちゃん……いけそうに、ない？」
「だ、ってどうすれば……いいか……っ」
当然のことながら絵里は射精などしたことないからわからない。勝手に出るものなのか、出そうとして出すものなのかもわからない。
「……わかった」
ことりが上下にゆすれるのを止める。出そうになる感覚は引いてくれず、取り残されてどうしようもなく腰に溜まる。
立てていた膝にことりの手が乗せられ体重が後ろへと移動する。一体何をするのかわからず、絵里は動けない。

「う、ぁぁ……ぁぁ」
背を逸らしてことりがよがる。当たり方が変わって絵里の腰が跳ねる。
ことりが前後に腰を揺すり始めた。
「ぁぁっ、ぁ、んん……、んっんっ」
声をむりやり抑えながら腰を振る姿に興奮も、快感も高まっていくなか、太ももをすっと撫でられた。
「！」
不意の愛撫に膝が跳ねる。
太ももを撫でることりの手が絵里の秘所へのびる。
「こ、とり？」
「手伝ってあげるね」
入ってきた指が浅いところをかき混ぜてくる。体勢が悪くて奥まで入れられないのだろう、それでも十分だった。
「あ、あ、まって、こと、り……っ！」
絵里の興奮が弾けた。
精を勢いよく吐き出す快感に身体が跳ねる。
「はぁ……っ」
絵里が詰まっていた息を大きく吐いた。
射精の快感はほんの数瞬。すぐに複雑な感情が湧いてきた。
幕引きがあまりにも強引で、一方的だった。
ことりとしてはこれでよかったのかもしれないけれど、あまりにあっけない終わり方で情けなくなる。
こんなに後味の悪いセックスははじめてだった。

◇

「う……、うぅ！……」
「絵里ちゃん？痛かった？」
「……っ」
涙が込み上げてきた。
言いようのない感情がふつふつと湧きあがる。
合意だったかはともかく、行為をなんとか受け入れようとしていたのに。
一方的にされてしまった。
絵里はまるで無理やり犯されたように傷ついている自分がいることに気づいた。
それもまた一方的に自分が悲しんでいるだけでやるせない。
腰を上げたことりの中から自分に生えた男性器が中途半端に萎えた状態でずるりと出てきた。その瞬間にも快感が走るのが悔しくてたまらない。
それ以上に怖くなった。
男性器を挿入された状態で善がることはいつもより気持ちよさそうで、行為に夢中になっていたように見えた。
このまま別れられて、男を作ったりしそうで怖い。
性行為だけがすべては無いとわかっていても、それが決定打になりうる可能性もある。こんなことで別れられてしまうかもしれないと思うと怖くて、どうしたらいいのか分からない。
その恐怖を思い知らされたようで少しだけ腹が立つ。
射精の後はこんな不安定になるものなのか。むしろ逆だと聞いたことがあるのに、自分はなぜこんなにも不安定になる

のか。
男性器は生えてしまったが、他は女のままで、この男性器がなくなるのかどうかもわからない。中途半端な身体に対する不安もあった。
どんどん不安が積もる。
「なんでこんなことするのよ」
無理やり射精させられたことも、へんな粉を盛られたことも、興奮剤入りのクッキーを食べさせられたことも。全部ひっくるめての言葉だった。
さらに、思ったようにできなかったことも、自分の気持ちが何も整理されないまま置いてきぼりにされてしまった悲しさが絵里の胸中で渦巻く。
今まで時間をかけて、お互いの気持ちを少しずつ合わせてしてきたことが全部無駄だと言われたようで辛かった。
「ちゃんと言ってくれたら、ちゃんとしたのに。なんでこんな、一方的にするのよ」
セックスをせざるを得ないような状況に持ち込まれて、男性器があれば誰でも良かったのではないかと思うやり方がやけに腹が立った。
「嫌いになった？」
「そうじゃなくて！」
こんなことで簡単に嫌いになるわけ無い。そんな薄っぺらな関係じゃないのに。
それに避妊具すらつけていなかったじゃないか。妊娠の可能性すら省みない強引さにも怒りを感じていた。絵里はこんなことでことりの人生を狂わせたりしたくないのに。

「妊娠したらどうするのよ」
「これにそんな効果はないって最初に教えてもらったから大丈夫だよ」
「だったら最初に言って！」
つい声を荒げてしまう。
怒鳴ったりしたくないのに、なぜそんなことをするのか。
自分はこんなに感情が高ぶっているのに、ことりはどうしてそんなに落ち着いていられるのか。
「……愛想尽かした？」
複雑な表情でことりが聞いてくる。
読み取りにくいその表情に引っ掛かりを覚えて絵里の怒りが急速に引く。
いつもはそんなことを言わないのに、どうして急にそんなことを聞いてくるのだろう。
こういうときは大体何かある。
本人は重要視していないが、ことりは自分のことを押さえ込む癖が思っている以上に重症だ。すぐに大事なことを隠してしまうから探し当てあげなければいけない。
見つけられなければ、ことりは離れていってしまうだろう。
「……ことりはどうしたいのよ」
「……」
聞いてもことりは困ったように黙ってしまう。
「時々、何考えているのかわからないこともあるけど、今日は本当にわからないわ」
自分が本当にどうでもいい相手だったら何を言っても上手くかわされてしまうだろう。絵里はこのままことりを手放す

気は毛頭ない。
だったら、回りくどいことはできない。
「私のこと嫌い？それとも嫌われたいの？」
「……」
黙ったまま複雑な表情になったことりを見て、なんとなく絵里はわかったような気がした。
わからないと思いながらも、少しはことりのことをわかっていた自分に安堵する。
たぶんことりは、嫌われた方がいいと、愛想を尽かせて別れさせようとしたのかもしれない。
来年になると留学してしまうから遠距離になるのが怖いのだろう。
「……ことり」
落ち着きを取り戻した絵里が手を伸ばす。
嫌われたり怒られたりするのが怖いくせに、どうしてこんなことをするのか。
不安を話してももらえないのか。
さっき湧いた怒りなんてもう一つも残っていない。不安を押し隠そうとすることりを早く抱きしめたかった。
肩に指先が触れると弾かれたようにことりが逃げようとした。腕を掴んでそれを阻止する。
「遠距離になるのが怖いの？」
「……そんな、こと」
声が強張っている。
「それに、途中からわざと怒らせるように仕向けたでしょ」
「……」
「沈黙は肯定とみなすわよ」
「……離して」
「嫌よ」
こんなことで無理やり別れさせたりしない。いつもは柔らかい絵里の青い目が鋭くことりを見る。
今日された諸々のことなんて、どうということは無い。
これで怒らせて別れようなんて考えのほうが許せない。
遠距離になった途端愛情が失せるような、そんな軽い気持ちで付き合っているわけではないのだから。
「……ことり」
怒りたいわけではないから、諭すように声をかける。
「だって！」
弾かれたようにことりが声を出した。
「こっちに帰ってくるのがいつになるのかもわからないんだよ？」
怒ったように声を荒くするけれど、目を見れば怒りなんてどこにも無い。不安そうに絵里を見てくる。
不安を受け止めるように絵里は真っ直ぐにことりを見る。
「その間会えないなんて辛いよ……」
ぽつりと漏らした言葉はいつも上手に隠す彼女の本音だ。
いつもそうやって小声でもいいから不安を聞かせてくれたらいいのに。そうすれば、きっともっと安心させてあげることもできたはずだ。
「もしかしたら向こうでいい人見つかったら乗り換えちゃうかもしれないし」
「なかなか酷いこと言われてるわよね私」

もらした本音を隠すためかもしれないが、ひどいことを言われて苦笑してしまった。
「だ、から」
唐突に声が震えた。
「だから？」
優しい声で絵里が聞き返す。
「……う」
震える呼吸と、言い切れずに唸っているのを見ると、些か覚悟が足りなかったらしい。
絵里は跨ったまま何も言えなくなったことりを抱きしめた。
「嫌われるか愛想尽かされるかして、別られた方がいいって思ったの？」
腕の中でことりが小さく頷く。
「すぐに会えないのが怖いのと、私を待たせるのが嫌だったのよね？」
もう一度ことりが頷いた。
ちゃんと聞けた本音に絵里は安心し、顔を綻ばせた。ことりの頭を撫でてやる。
「私は、穂乃果みたいに止めにいくことはできないけど、ちゃんと待つことはできるわ」
まるで聞き分けのよい犬のようだと、自分で言っておいて苦笑してしまう。それでも仕方ない。できることしかできないのだから。だから絵里はできる限りのことをしたい。
「だから、こんなことされても嫌ったりできないし、愛想も尽きないわよ？」
抱きしめていた手で頬を包んで顔を上げさせると、いまにも溢れてしまいそうなほどに涙を溜めた瞳と目が合った。
「うう……」
こんなになるぐらいなら最初からしなければいいのに、と思うが口には出さなかった。
経験しなければ分からないことだってあるだろうから。
「すごくびっくりしたし、混乱もしたけど貴重な経験をしたわ」
「……ごめん、なさいで。不安があるならちゃんと話して」
「もうこんなことしないで。不安があるならちゃんと話して」
「……うん」
顔から手を離して再び軽く抱き寄せると、背中に手が回され、しがみついてくる。やっとちゃんとことりの肌を感じることができた気がした。細くて柔らかくて気持ちいい。
股間にあるものが反応を示して絵里は笑いそうになった。

◇

あんな無理やりやらされただけで終わるなんて嫌だと思った絵里は、ことりの手を引いてベッドにうつ伏せに寝かせた。
「もう一回するわよ」
クッキーに混ぜられていた薬はまだ効果が薄れていないようで、絵里に生えたペニスはもう膨張している。
万が一、ことりが留学先で男性と何かあっても満足できないようにしてやればいい。と、強引な考えになったのも薬のせいかもしれない。
興奮してしまったらもう思考が止まってしまう。

その身体を触って、早く入れてかき混ぜて突き上げて、中にたくさん出してやりたい。ひどいことしか考えられない。頭の中はもう発情したけだものの様だ。

うつ伏せにしたことりの腰を持ち上げ、勃起したペニスの先を押し当てる。先ほどの行為から間もないせいか、ことりの恥部はまだ濡れている。

「するのはいいけど、うつ伏せなの？」

「だってさっきはことりの好きなようにされたんだから、今度は私が好きにやる番じゃないの？」

「えっ！そうなの？」

「いれるわよ」

ことりの疑問を無視して張り詰めた先端を押し込んだ。卑猥な音を立てて絵里の先端がことりに飲み込まれる。

「あ……ぁぁ」

挿入の快感にことりが身体を震わせ、声を漏らす。その声に興奮して絵里のペニスはまた少し硬くなった。

ゆっくりと奥に挿入していく。濡れた柔肉に包まれる感触が気持ちよすぎて癖になりそうだった。

「痛くない？」

聞くとことりはがくがくと頭を縦に振った。さっきより余裕がない。

痛がるどころか内側はしっかりと咥え込んで締め付けてくる。

気を抜けばすぐに出してしまいそうになるほどに気持ちい。一度腹筋に力を入れて、ゆっくりと息を吐く。

「さっきみたいにすぐに終わると思わないでね」

自分の声が興奮で震えている。

止まっているのもう限界だった。ことりの中に埋めたものはもう硬くなってしまっている。

絵里が腰を動かし始めた。

隠微な音を立てて肉棒がことりの中を犯す。

始めはゆっくりと、しかしすぐに勢いが良くなる。

「あっ！や……っ絵里ちゃん！」

「ことり……！中……すごく、気持ちいい……！」

突き入れるたびにことりのお尻が腰に当たる。その弾力も、濡れた内側が絡み付いて扱かれる感触も気持ちよくて止められない。

腰を叩きつけるように動かすたびにぶつかり合う音が鳴る。激しい情交にベッドのきしむ音も大きくなる。

「あぁあっ」

声を上げてことりが達する。

「う、……っあ、ことり……！」

きつく締め付けられて射精を促されるが、まだ終わりたくなくて絵里は腹筋に力を入れて堪える。

「で、出そう……！」

腰を引いて絵里が止まる。ことりはそれに構わず腰に押し付けてくる。再び中に飲み込まれる快感に射精しそうになったが何とか我慢する。

「や、止まらないでっ、絵里ちゃん……出してぇ！」

快感を求めて自ら腰を動かすことりは最早性欲の塊のように見える。

このまま出すのが勿体無いような気がして、ことりの中か

ら性器が出てしまいそうなほどに腰を引いた。
「やだぁ……、絵里ちゃん……」
四つん這いの状態で振り向くことりは目を潤ませ、媚びた声で名前を読んでくる。
「……」
媚びた表情のことりを見て絵里の我慢が限界を超える。
そうだ、中で出したって問題ないとわかっているのだ。だったら思う存分出してやろうと絵里はことりの腰を掴み、そのまま背中に覆いかぶさった。
片手で体を支え、鼻先で髪を掻き分けるとことりの匂いを強く感じた。うなじに舌を這わせて、噛み付く。驚いて身体を跳ねさせ、絞り上げるようにきつく締め付けられる。
動物が交尾をするような体制だ。動きづらいがひどく興奮する。奥を押し上げるように絵里は腰を振り続ける。先端が奥を突くたびに吸い付いてきた。その感触が気持ちよすぎて止められない。
動くたびにことりの背中に押し付けた乳首が擦れて気持ちいい。
「あっ、やぁあっ、奥、あぁあっ」
ことりの声はもう言葉にならない。背中を逸らせてひたすらに善がる。
「ふっ、んんぅ、ふぅ、んんっ」
絵里はうなじに噛み付いたままで声を上げられず、熱い吐息を吐く。もう限界が近い。
「――あぁっ！」
短い悲鳴を上げてことりが絶頂に登りつめる。精を求めてことりの膣が絞り上げるように収縮する。
「んんっ」
その動きに合わせ絵里が達する。うなじから口を放し、ガクガクと身体を震わせるほどの快感に襲われ、絵里は思い切り射精した。
「あ……はぁっ、う……あっ」
脈打つ性器にあわせて腰を振り、溜まったものを全て飲み込ませていく。さっきより多く吐き出される。絵里自身驚くが出てくるものは仕方が無い。もう一度強く突きこみ、最後の一滴まで出し尽くした。
「……はぁ……」
開放感と脱力感が同時に襲い掛かってくる中、ことりの中からペニスを引きずり出した。
ずるずるとベッドに沈むことりを抱きながら絵里も寝転ぶ。腕の中で呼吸を整えようとすることりが小さく震えている。余程感じていたのだろう。
「えりちゃん」
呼吸の整わないことりが唇を寄せてくる。軽く触れて離れて、また近づいてきて段々と深くなっていく。
こんなキスをされたらまた勃ち上がってしまう。休む暇を与えてくれないことりに困りながらも絵里はキスに答える。
萎えていたものがまた硬くなる。
唇を離してことりを見ると、潤んだ目で見られた。またスイッチが入っている。
「また硬くなってきたけど？」
まだ今なら止めれるけど、と目で聞いてみる。

もう止めてくれるかと思ったけれど、ことりは身体を起こして絵里の足元に移動する。
「……ことり？」
足を開かされる。身体からまだ脱力感が抜けず抵抗できない。
ことりが手を伸ばして中途半端に勃ちあがったペニスを掴むと口に含んだ。
「ちょ！」
予想外の行動に絵里が焦る。
ことりの舌がペニスを舐め上げていく。
「あ、あぁ……っ」
少しざらついた舌が幹を舐め上げていく感触に絵里は身体を震わせ、声を上げる。
舌を使ってセックスすることはあるけれど、これはいつもするのとは全然違う。
いつもより長く感じる快感、口内の温かさに時々吸われる感触。舌が這うたびに身体にかける痺れに背中が逸れる。腰の方へ血が集まってくるような感覚。動かしそうになる腰を必死に抑えた。
「ことり、まって。それ、だめ」
シーツを掴んで駆け上がっていく快感に耐える。きつく吸われる度に身体が震える。
「ことり！お願い、止まっ、て……！」
身体を起こしてことりを無理やり引き剥がす。
このままではことりの口に乱暴なことをしそうだった。
口を放したことりの唇から垂れる唾液にぞわぞわと興奮が湧き上がる。絵里の興奮を示すようにペニスは腹につくほど力強く反り返っていた。

◇

少々乱暴にベッドに押し倒したことりの足を掴んで開かせた。
ことりが期待に満ちた目で、勃起して反り返った絵里のペニスを見る。
ことりが欲しがるまにするのもなんだかおもしろくないと思った絵里は少し考えた。
「……挿れてほしい？」
無言でことりが頷く。視線は絵里ではなくペニスに釘付けだ。その欲情しきった雌のような視線に怒ってもいいかもしれないと思いつつもペニスは先走りをこぼし、女の部分は涎を垂らしているのを自覚する。
「素直ね。私以外のを欲しがっちゃだめよ？」
何度もことりが頷く。
「留学先でもだめよ？欲しくなっても我慢できる？」
「我慢する……。絵里ちゃんしか要らない」
その言葉を聞いて満足気に絵里が笑う。
「明日になってもこれがあるとは限らないのに？」
ことりの唾液にまみれたペニスを軽く扱く。早くあの柔らかくて湿った狭いところに埋めたくて仕方が無い。
「意地悪しないで……」
「ん？」

「絵里ちゃん以外に触られたくないの。指でもいいから」
泣きそうな顔で懇願するように言われて絵里は満足した。
開いたことりの足の間は先ほどよりもひどく濡れている。
「……ん」
吐息を漏らしてひくひくと身体を震わせたことりが、先ほど絵里が大量に出したものを溢れさせた。
「私が出したものが漏れていくのに感じちゃった？」
意地の悪い絵里の質問にことりが頷く。小さな音を立てててまたあふれ出させた。言葉での辱めに興奮するらしい。新しい発見だった。
まだ焦らしてやろうかと思ったが絵里もう限界だ。疼いて仕方が無い。
「また、いっぱい出すから」
反り返ったペニスを掴んでことりの中に埋めていく。腔内が悦ぶように蠢き、飲み込んでいく。
「溢れさせるところ見ててあげるわね」
「あぁぁ……」
愉悦の声を上げてことりが背を逸らす。奥へ導くように身体をうねらせる。
奥まで押し入れてことりを抱きしめた。
汗をかいた柔らかい肌が吸い付くようで気持ちいい。
ゆるく腰を動かすと、首に腕を回されて引き寄せられて深く口付ける。唾液を交換というよりも混ぜ合わせるように舌を激しく絡めあった。
全身にことりが絡み付いてくる。腕も、足も、舌も腔内も。
「……もっと動いて」
吐息のかかる距離でことりが言う。
「奥、が……、疼くの」
ことりは激しく突かれたいらしく、腕を放し自ら足を開いた。
絵里が身体を起こし、開いていたことりの足をさらに開かせる。身体が柔らかいからどこまでも開く。
「見て」
絵里の声に視線を動かしたことりが、ペニスを咥え込む己の女性器を見せ付けられて羞恥を覚えるが、すぐに興奮に変わる。絵里が腰を動かし、ペニスが抜ける。抜けた瞬間跳ねるように上を向いた。先端からは糸を引いていた。
「抜ける瞬間まで絡み付いてた」
ことりに見せつけることによって絵里がさらに興奮する。
「ねぇ、ことりが挿れて」
絵里に言われるままにことりは手を伸ばし、ペニスを自身の入り口にあてがう。腰を沈めようとするが、足を掴まれてこれ以上動けないことりが目で絵里を促す。
絵里は半ばまで埋めると足から手を離し、膝の裏を腕に乗せたまま腰を掴んだ。華奢なことりの腰を引き寄せ思い切り自身の腰を押し付ける。
「あああっ！」
ことりが喚起の声を上げる。奥まで一気に貫かれ、刺激で足を跳ねさせた。
絵里が立て続けに激しく腰を動かす。一方的に与えられる刺激にことりは声を上げ続ける。口の端から涎が垂れるがそれを気にする余裕など無かった。

一心不乱にピストン運動をする絵里はことりの子宮が降りてくるのを感じた。子宮口を突くたびに先端が吸い付かれ、収縮する膣壁に幹が絞り上げられて激しい快感が走る。

果てそうになるのを感じて絵里が動きを緩め、ことりの腰から手を離し、足を下ろしてやるとつま先をベッドに食い込ませてことりが自ら腰を動かしてくる。

そういえば触っていなかったと思った絵里が自由になった両手でことりの胸を鷲掴みにする。手の中に乳房の柔らかさと乳首の硬さを感じて、揉みしだいた。

「あ、やだっあっあっ」

善がりながら腰を振られ、絵里もまた腰を強く突き動かす。

「う、あ……ああ……」

自然と絵里の口からも声が漏れる。限界が近い。

胸から手を離して再び腰を掴み深く突き上げる。何度も締め付けられてことりが何度も軽く達しているのがわかる。しかし絵里はもっと強く締め付けられないと達せない。

片手をことりの下腹部へもっていく。濡れたことりのクリトリスを強く押しつぶした。

「あ、あああ、い……っく……！」

身体を強く震わせて、ことりが登りつめた。

きつく締め付けられて絵里の意識が一瞬、白く弾ける。

さっきよりも勢いよく射精した。あまりの快感に二度、三度と射精する。

どれだけ出るのかと恐ろしくなりながらも、絵里はことりの中に大量に精を吐き出した。

◇

「なんでわざわざこんなことしたのよ」

疲れ果ててベッドの上で二人とも裸のまま布団に包まった状態で、絵里がぽんぽんと聞いた。全部済んだ今なら本音を話してくれる気がしたから。

「だから留学先でレイ……」

「いやそうじゃなくて」

その発想に行き着いた理由を聞きたかったのだが、聞いても理解の範疇を少しばかり超えそうで、絵里はちゃんとした答えを期待しないことにした。

「絵里ちゃん、女の子同士の指でセックスっていうのはさ、しちゃったら処女じゃなくなるの？」

それは、今日最初に絵里がした質問だった。

考えられることは二つ。

処女の定義が男性器を入れたことが無いということなら、処女だろう。

同性でも性行為をしたことがあるということなら非処女だ。

正しい答えがどちらか絵里には分からない。

考える絵里の答えを待たずにことりが話し出す。

「とりあえずね、処女で行って男性に何かされたら怖いなって思ったの」

治安が良くても悪くても、何かしらことりに言い寄る男性は現れるだろう。本人の意思とは関係なく何か起きることだって無いとは言い切れない。

「初めては痛いって聞くし」

ことりの声が思いつめたように低くなる。
知らない土地に、ましてや外国に一人で行くのだから、怖くて当たり前だろう。
絵里が思っているよりことりは不安を抱えていたのかもしれない。
「だったら絵里ちゃんのおちんちんがいいなって！」
「大きい声でそういう単語を言わないの！」
女の子一人で住むのだからと、親と選んだこの部屋の壁はそれなりに厚い。しかし、家賃の安いだのIKのマンションだから防音処理が徹底されているわけでもない。
行為の最中も結構大きな声を出していたし、隣に漏れている可能性もゼロではない。隣の住人が留守にしていることを祈るばかりである。
「あぁもう」
本当にペースを崩される。絵里は衝動のままに頭をぐしゃぐしゃと掻いた。
「絵里ちゃんごめんね」
むき出しの肩に額を押し付けてくることりがぼそりと呟いた。
「ことりのわがままにつき合わせて」
ああ、ずるい。ほんとうにずるい。こういうところは本当にずるいと、絵里は溜息を吐く。そんな風に言われると怒れなくなる。もともと怒る気はなかったが。
「ほんとにね。わがままでここまでできるのもすごいけど」
軽く頭を撫でる。ときどき手段を選ばない怖いところもあるが、基本的には好きなのだからどうしようもない。愛の力は偉大だ。大体全部許してしまう。
「嫌だったよね？」
そういえば驚いてばかりで嫌とかそういう感情を持つ余裕もなかったと思い、絵里は困ったように笑った。
「嫌じゃなかったから、そんな顔しないで」
指先で頬を撫でる。ことりの表情が柔らかくなっていく。
困った顔も好きだが、はにかむ表情はもっと好きだ。
「絵里ちゃん」
「ん？」
柔らかい声で名前を呼んできて、目を細めて擦り寄って甘えてくる。ことりの最高に可愛い瞬間。絵里がことりを甘やかしてしまう瞬間でもある。
「こんな機会もう無いかもしれないから色々触らせて」
「……」
ことりは絵里が甘やかしてしまう表情でそう言った。
「嫌じゃなかったんだよね？」
笑顔でことりが迫ってくる。
絵里の表情が凍りついた。

◇

気がつけば朝だった。
信じられないと思いつつも、絵里の意識は段々と覚醒していく。意識がはっきりしてきた頃に身体に違和感を覚えた。
それでも驚くことは無かった。
夜の間ことりに散々触られ、いじられ、仕返しに色々した

せいか起きた瞬間の違和感にも、ああ……これが朝勃ちかと、思うだけだった。

たった一日で慣れてしまった自分に頭を抱える。

頭を抱えた瞬間、身体中に痛みが走った。全身が筋肉痛になっているのを嫌でも思い知らされる。さらに身体を見ると、恐ろしいほどにいろんな跡がついている。歯形、キスマーク、引っかき傷。あまりに悲惨な状態に呆然としてしまう。

「……嘘でしょ」

嘘ではないと分かっていても呟いてしまう。

昨日は本当に異常だった。

疲れて休んでもクッキーに入れられていた興奮剤のせいですぐにスイッチが入るし、お腹が空いても冷蔵庫の中も調味料も全部あの怪しい粉が盛られているから食べられない。

宅配のピザを取ろうにもメニューを見て迷う間にセックスが始まる。

結果、空腹に耐え切れなくなり、目の前にあったことりの作ってきたクッキーを食べるしかなく、また興奮してセックスしてしまうという無限ループが完成した。

一晩で散々いろんな体位を試し、ことりに弄り回されて、何も出なくなるまで何度も絶頂を迎えて正直死ぬかと思った。

それなのに、寝て起きたらこれだ。絶倫なのかと自分を疑ってしまう。いやいや、あのクッキーの効果がまだ出ているだけで、もう何時間もすれば正常に戻るだろう、と絵里は自分を励ます。

とにかく、まずは今の状態をどうすればいいのか考える。処理すればいいのか、放っておいても戻るのか。今まで朝勃ちなんて経験したことが無いからわからない。

「うううう……」

隣で寝ていたことりが唸りながら起き上がった。朝練があるのかもしれない。身体はだるいけれどがんばって起きようとする気概は見える。

「おはよう」

「うううう、おはよう絵里ちゃん。なんか全部痛い」

掠れた声のことりがベッドの上でうずくまるように体育座りになっているのを見て、そりゃそうでしょうよ、と言いそうになるのを飲み込む。あれだけ激しいことをしたのだから、全身筋肉痛の上にお腹も痛いだろう。

「大丈夫……朝錬行ける？時間大丈夫？」

痛いのが少しでもましになればと、腰の辺りを擦るとことりが体を強張らせた。

そんなに筋肉痛がひどいのかと思い、心配になった絵里が筋肉痛にもがきながらも、なんとか身体を起こす。

いつ寝たのかも覚えていないほどに情交に及んでいたせいか、お互い何も着ていない。身体が冷えるだろうと布団を広げて背中にかけようとしたとき、ことりが一瞬慌てた。

「どうし……あぁぁ……」

ことりの股に男性器がついているのが見えて絵里はそのままベッドに崩れ落ちた。

クッキーに例の粉がかかっていたのだろう。そして粉とことりの相性は抜群だったらしく、一晩にして効果が発揮されたというわけだ。

「すごいわね。私ひと月以上かかったのに」

「あ、ある意味絵里ちゃんもすごいんだよ？タイミング的な意味で」
「……それは、確かに」
昨日のことを思い出してしまい、絵里の身体がわずかに反応してしまう。首を振って思い出したことをかき消そうとすると筋肉痛に物凄く響いて呻いた。痛すぎて思い出すどころではない。目的は成功したが、身体は物凄く痛かった。
「それよりどうしよう……今日練習あるのに」
絵里の悶絶を完全に無視してことりが呟いた。
「と、とりあえず体調悪いって言って休みなさい」
声も少し枯れているから説得力もあるだろう。
とりあえず、こんな状態のことりを外に出すわけにはいかない。それ以前に身体中についた跡は普段の練習着では隠しきれないだろう。
「絵里ちゃぁん……」
ことりが泣きそうな声で呼ぶ。
「なに……あぁぁぁ……」
目を向けた途端、絵里は再び崩れ落ちた。
昨日のクッキーの効果がまだあったのか、ことりに生えた男性器はみるみる勃ちあがり、反り返っていく。
「あぁ、もう……」
できれば見たくなかった。男性器がついてようがことりのことは変わらず愛せる。でも、できれば見たくなかった。
とにかく元の状態に戻したくて絵里は頭を回転させるが、何も答えは出ない。こうなった原因の粉がどういうものかも分かっていないのだから思いつくはずもなかった。
背中に冷や汗をかきながら絵里は恐る恐ることりに尋ねる。
「……これ治るの？」
自分のものは一晩経ってもしっかりと男性器の形を保っている。こうなるのに何日もかかったのだからすぐに元通りになるとは思っていないが、一生このままなんてごめんだった。
「あ、それはね。用が済んだら連絡しなさいってにこちゃんが」
「ちゃんと元に戻す方法あるのね」
「うん」
安心した絵里は落ちきを取り戻した。元に戻せるならそれでいい、しかしその為に、にこに報告しなければならないのが辛い。
「まぁにこに連絡するのは後でいいとして」
絵里の手がことりに生えた男性器を軽く掴む。
「ひぇっ」
ことりは怯えたように小さく悲鳴を上げた。生殺与奪を握られているような気分なのだろうと絵里は理解する。昨夜、好き勝手にいじられていたときの自分がそんな感じだった。
「それで、ことりはどうしてほしいの？」
「えぇっ？」
「口？手？」
ベッドの端に追い詰めていく。縮こまることりの膝を掴むと怯えた顔でこちらを見た。
「絵里ちゃん、こ、ことり、海未ちゃんに連絡しないと」
「メールで風邪引いたから休むって送りなさい」
真面目なことりがメールで送ってくるということは、話せ

ないぐらいに体調が悪いと解釈されるだろう。気遣いのできる海末なら、体調を気遣っていきなり電話をかけてくることは無い。

「昨日散々好きにしてくれたわよね」

「うう……」

怯えた目を向けられてぞくぞくする。

起きた瞬間から勃起していた自分のものが疼いた。

これはまずは自分のものを何とかしてもらうのが先かもしれない。

絵里は薄く笑ってことりの唇を奪いに行った。

完

秋太郎 / 真姫×花陽

Syutaro/Maki×Hanayo

もぞっ…

ん…

真姫ちゃん、もしかして具合悪いの？
ああ、花陽…

大丈夫よ
ぎゅっ

ドキッ
それより花陽、放課後うちに来てくれないかしら

相談したいことがあるの
コク
う、うん！わかった！
コク

おじゃまします

ぱたん

真姫ちゃんのお部屋広くていいなぁ

花陽の部屋物が多くてー

すっ

!

ま、真姫ちゃ…

もぞっ

!?

ま、きちゃん

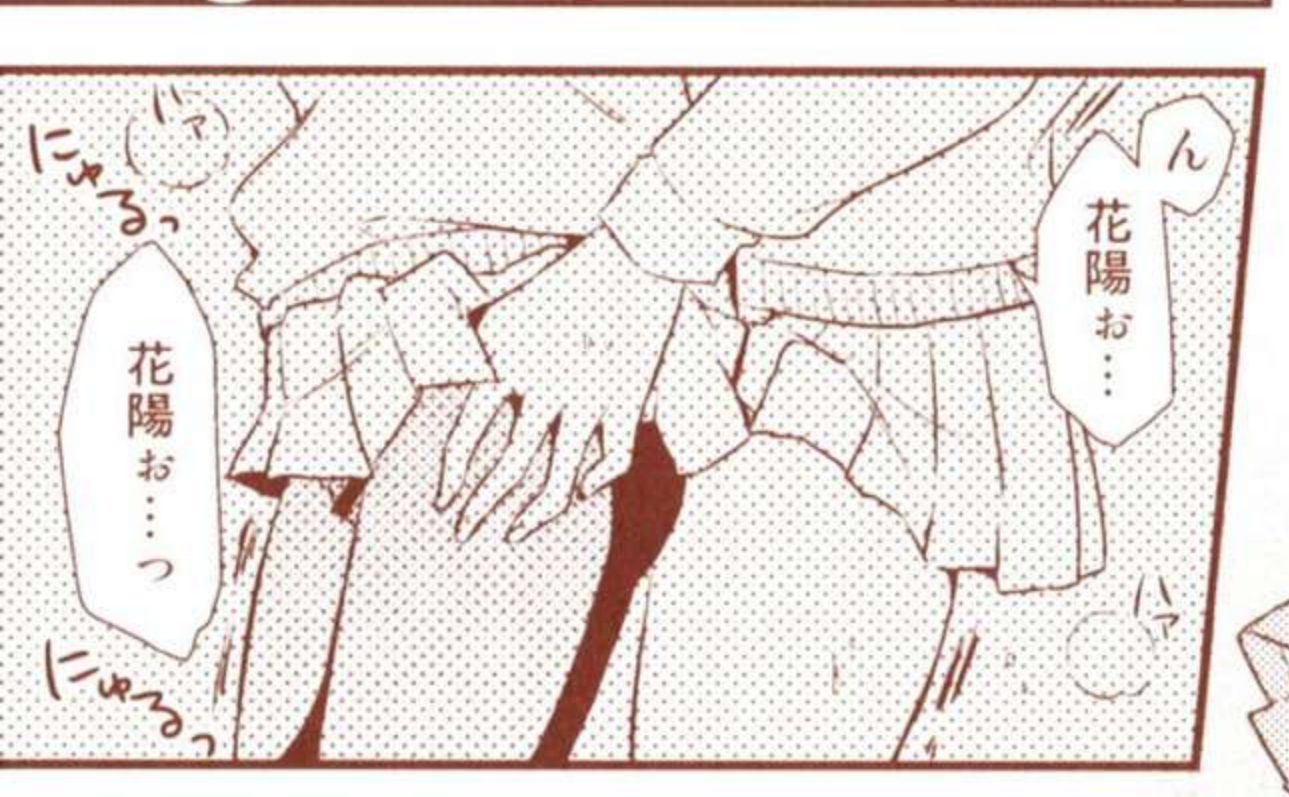
その…花陽のお尻になにかカタいものが…？

花陽ごめん…

!

するんっ

ふぁ…っ♡
花陽のふともももきもちいい…♡
にゃるっ
にゃるっ


ん
花陽お…
にゃるっ
花陽お…っ
にゃるっ

!?
ビクッ
にゃるっ
あ♡
…っ
ビクッ

…あ…
ペロン
ドロ

ま
真姫ちゃ…
あ…
ごめん…なさ…
ごめ…っ
…ぐす、
…
うん
花陽は
平気、だから
ぎゅっ
泣かないで
真姫ちゃん…！
……

ん…ありがとう花陽

もう、大丈夫

…うん

それで真姫ちゃん

その

コレはいったい…

プルプル

いやそれがどうしてコレが生えてきたのか

私にもよくわからなくて…

学校にいた時にはもうこうなってたんだよね？

本物…??

何か変わったことはなかった？

ふに

ふに

ん…そうね…

ムズムズする…

にこちゃんからめずらしい飲み物を勧められたわね…あと凛と希も

その後ことりからちょっと変わった味のクッキーを貰ったわ

それから穂乃果からおまんじゅう

なんとなくわかったから

うん

もういいよ真姫ちゃん

えっ花陽すごい

真姫ちゃんヘンなところ素直だから…

じゃあ4人に電話して聞いて…

花陽っ！そ、その…

はうっ

その前にさっきみたいに触ってくれないかしら

この状態ちょっと辛くて…

ね…

ダメ？

花陽…っ

はうっ

真姫ちゃんのおねがい…っ

きゅん♡

…うん いいよ

ベッド行こっか

あ 真姫ちゃんちょっと待って

?

ミミミ

!…

ふぅん…
たまには脱がして
もらうのも
悪くないわね

プチ

プチ

プチ

でもやっぱり

こっちの方も
したいわよね

もう…

すると

あ

そういえばタイツ
汚しちゃって
ごめんなさい

あれって…
気持ちよかったの？

…

花陽で気持ち
よくなって
射精しちゃった
んだよね？

ちゅ

そう、よ

だから、
はやく…

きゅっ

…うん

あ♡

それ

いい…っ♡

どくどくどくどくっ♡

スコ

スコ

真姫ちゃん
かわいい…♥
あんっ♥

ちゅ♥
ちゅっ♥
ちゅっ♥
あ…

花陽に、私の
食べられちゃってる…
はむ
はむ

じゅぽ
ん
じゅぽ

ふ
あ…っ！
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
も、ダ、メ…!!

ちゅぽっ
ゴクン
!
まっ…
まきちゃあああんっ!!
ビックリしたよぉ…!
飲っ…!?
ごめん…
余裕なくなっちゃって…
ううん、花陽の方こそ夢中になっててて気がつかなくてごめんね
これでラクになったかな…
ばきーーんっ

…っ

まだ元気…

ちっ

違っ

いや違わないけど違うのよ…!?

真姫ちゃん

ビクッ

はいっ!?

…は?

ちょっ

ちょっと待って花陽…!

するっ

もう一回、しよ

するっ

も

真姫ちゃん
まだ満足して
ないんだよね？

ピクッ

んっ…

きゅっ

それとも

このままで
いい？

ハァ

ハァ

…はっ

花陽…

あなた
随分
いじわるなのね

知らなかったわ

花陽が
やらしいカラダ
してるから
こんな風に
なってるのに

ピク

ピクッ

もっと花陽できもちよくなって…

うん…だから真姫ちゃん

ヒ…♡

ビク

ビクッ

あ♡

花陽のナカ…っ♡

ナカに…っ♡♡

ちゃ…♡

は…

入ったよ
まきちゃん…

きゅうっ♥

あ

うん

ハァ

ハァ

花陽のナカ、
すごい…♡

あっ♡

真姫ちゃ…

急に
動いちゃ…♡

ズボ

はあっ♥

花陽…っ
はなよぉっ♡♡

はあっ♡
はあっ♡

ズボ

はっ、花陽っ締めつけないで…!!

あんっ♡

ズプッ

ズプッ

プルンッ

まきちゃん…っ

ムリだよお♡♡

すぷっ♡

もう少しやさしくして…!

すぷっ♡

ハァ

ハァ

こっ

ハッ

ここまでされてやさしくなんてできないわよ!

ぐるっ

ふあっ…?!

あ♡ひぁ…っ♡

まきちゃ…♡

ズッ!!

ズプ!!

ズプ!!

っ…花陽

ごめん、やっぱりやさしくはできないかも…

……

じゅる

じゅる

…っ

んっ、ああ…っまっ…まきちゃんっ♥

あ♡

まきちゃんのおちんちんすっごく熱いよぉ…!!

うん、大丈夫

真姫ちゃんの好きにしていいよ

ゴクン

そんな風に言われたら…

…もうっ!!

ぐいっっ

あっ♡

奥の方…♡ キモチいいとこあたってるっ…♡

まきちゃ…っ 花陽、もう…!

すりすりっ

すりすりっ

花陽っ…
私も、もう、イキそう…

うん、
まきちゃん、
いっしょに…！

じゅぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ

きゅうううんっ♥

じゅちゅっ

あっ♥

あ♥

花陽…っ

ビュッ
ビュッ

ぶるぶる

ぶるぶる♥♥

くた…っ

…ちゃ…

真姫ちゃんっ！

パチッ

カラダ元に戻ってるよ！

え

あ！

本当？

よかったね…！

ありがと…花陽のおかげだわ

それで、その…

できればもう一回…

もぉ、仕方ないなぁ…♡

ん♡

あっ♡

後日

ごめん また生えた…

Happy End？

抹茶リトロ / 海未×ことり

Maccha Ritoro/Umi×Kotori

自分よりもすらりと長くてきれいなそれに、無性に触れたくなった。

海未ちゃんは、きれいな手足をしている。

身長とか体格とかはほとんど一緒なのに、手足の大きさはぜんぜん違う。

硬くなった指先だとか、ちょっと癖のついてしまった関節だとか、肉付きの薄い甲だとか、いびつだと言って苦い顔をするけれど。てのひらがことりのそれより大きくて、それに合わせたように指だってすらりと細くて長くて、爪だって縦長の平べったくてきれいなかたちをしていて。大きくてかたちのきれいな足首から先だとか、細いのに引き締まった筋肉のついた太ももとか、動くたびにうっすらと筋の浮くふくらはぎとかどうしようもなく目を引いて。

ことりのちっちゃくてふくふくしている手だとか足なんかよりもずっと、きれいだと、思うのに。

自分の手はそんなことないと頑なに否定しておきながら、ことりの手はきれいですね、なんて愛おしげに目を細めて笑うのだから、海未ちゃんはずるい。とっても、ずるい。うそだって、思うのに。それ以上何も言えなくなっちゃう。

「そのきもち、穂乃果もわかる気がするなあー」

にへらってとろけそうな顔をして言ったのは、穂乃果ちゃんだった。

「絵里ちゃんの手大好きだから、ついぱくって食べたくなるもん！」

「ん……んん、ちょっと、違うような？」

「そう？触りたいなーってすっごく思ったらこう、ぱくっ、ていかない？」

「……いかない、かなぁ」

「そっかぁ」

ことりちゃんの手もかわいくてかじってみたいけどなぁ、なんて可愛い顔してさらりとちょっとこわいことを言われたような気がする。

穂乃果ちゃんは昔からすこし噛み癖がある子だけれど、絵里ちゃんと付き合うようになってからその癖が悪化している気がする。この間だって絵里ちゃんが肩に大きなバンソコウをしてきて、希ちゃんたちに冷やかされていたけど、きっとあれ、キスマークとかそんなかわいいものじゃなくって、噛み痕なんだと思う。顔を時々しかめてたし、涙目だったし。

「そうだねえ……海未ちゃんって武道とか舞踊とかやってたからかなあ、あんなにすらーっとしてきれいなの。私だって剣道とか一緒にやってたのに、ちっとも大きくならなかったんだよねえ」

唇を尖らせて、じいと自分の手を見やる穂乃果ちゃん。穂乃果ちゃんの手はことりとそんなに変わらない大きさをしているけれど、指の形だとかはすこし平べったくてきれいな爪をしている。海未ちゃんの指にすこし、似てる。逆にことりの丸くて短い爪はすこし絵里ちゃんに近いけれど、指の長さだとかはぜんぜん違う。胴に対して手足の長さがまったく、違う。絵里ちゃんはパーツの一つ一つが日本人ばなれしていた。

「ことりは穂乃果ちゃんたちみたいなきれいな指がよかったなあ」
「ことりちゃんの手かわいいよ。女の子、って感じ」
「そうかなぁ……」
「海未ちゃんもそこがかわいいって思ってるって」
「そう、かなぁ」

そうは言われても、やっぱり、ちっともそうとは思えなかった。

縫い物をするのに長さはそんなに関係は無いけれど、もう少し長かったら真姫ちゃんがピアノを弾くときのようにもっと器用に動くんじゃないかなあとか。
「ことり？」
無意識に伸ばした指先が触れたとたん、熱いものに触れたかのように、その腕がびくりと跳ね上がった。
指先をかすめたかるい衝撃に、跳ね除けられたのだと気づく。痛みはなかったけれど目をまあるくしてまじまじと自分の手を見つめていると、慌てた様子でその手が伸びてくるのだった。
きれいだな、と思ったその長い指が、おずおずと、指先を握った。少し硬くて熱い、それ。じんわりと体温を伝える。なんだかそれは、警戒心の強い野良ちゃんが甘えてくる仕草に似ている気がする。
「ご、ごめんなさい！」

「ううん。ごめんね？びっくりさせちゃって……」
「いえ、私が。少しぼうっとしてたみたいでごめんなさい」
「今日は暑かったもんね。大丈夫？のぼせてない？」
「はい、ことりこそ」
「私は大丈夫だよ？今はうみちゃんの方が心配だなぁ」
握られた指をきゅうと握り返して顔を覗き込めば、海未ちゃんはかすかに頬を赤く染めつつもきりりと表情を引き締めた。
「いえ、まだ夏の盛りも遠いのですからこれぐらいでは。いっそう気を引き締めなくてはいけませんね」
「ううん、そういうがんばりやさんなところもステキだけど、息抜きも必要じゃないかなぁ」
「メリハリはつけていますよ？筋力をつけるのにも鍛錬だけでなく休息が大事ですから」
クールダウンは大事ですからね、なんて。ちょっぴり自慢げな、海未ちゃんの可愛い顔。
「うーん、ちょっと違うような気もするけどぉ……休憩をちゃぁんととってるなら、安心、です」
「……ことりこそ」
「ん？」
「ことりこそ夢中になって休憩を忘れること、結構ありますよね？いけませんよ。今日だってキリがいいところまでやりたいといって、こうして残っているでしょう」
机の上にちらりと送られる、視線。広げられた衣装は、今度のライブで着る予定のもの。過剰なフリルと短い丈のそれに、ちょっぴり頬が引き攣っているようなきがするのは、きっと気のせい。

「ことりは……大丈夫ですよ？」
「嘘はいけませんよ」
「嘘じゃないもん」
「……」
じいと見つめる瞳がなんだか飼い主に待てをされたワンちゃんみたいでかわいいなあ、って。すこし見当外れなことを思いながら、するりその指をほどこうとする素振りをみせてみる。
「……うみちゃんが今日ずうっとおうちにかえるまで手を繋いでてくれるなら、ことり今日はこれで帰ろうかなぁ」
「う……え、あ」
わずかに手を引く素振りをみせると変なところで察しのいい海未ちゃんはびくりと肩を震わせた。
「ねえうみちゃん、どうしようか。このままだとことり作業できないなあ」
ねえ、どうする？そう、首を傾げてみせると、ほんのり色づいていた程度の頬を耳まで真っ赤に染めつつ、ほう、と深い息をついて。
「……離しません」
「じゃあ、帰る」
指で手繰り寄せてするりと腕を組むと、ぎくりと体をこわばらせるのがわかった。彼女に触れる度、逐一そう。嫌われてるなんて全く思わないけれど、やっぱり海未ちゃんは、誰かに、ことりに触れるのが、苦手なんだと思う。
「しかたがないですね、ことりは」
それでも恐る恐るあいた手でさらりと髪をなでてくれる海未ちゃんがとても、好きだと思った。

「ただいま帰りました」
「おじゃまします」
なんだか離れがたくて一緒に宿題をしたいなんて言ったら、海未ちゃんは疑う様子もなくお部屋へと招き入れてくれた。おばさまもおじさまも今はご不在のようだった。
「道場の方ではないでしょうか」
まもなく戻るでしょう、そういって海未ちゃんはそっとお部屋に上がるよう促してくれる。鞄を置くとそのまま居間の方へと姿を消してしまったけれど、多分お茶の用意をしてくれているのだろう。
綺麗に整頓されたお部屋の中には無駄なものなんてない。一人で勉強するときは部屋の隅の机を使うのだろうし、お布団だって押入れの中にしまわれているから、お部屋の真ん中にはなんにもない。年頃の女の子にしては物がなさすぎじゃないかって思うけれど、さり気なく飾られた花とか和調の小物とか、そんなところに女の子らしさも感じられる。はしたないかなあと思いつつ、なんとなく畳にごろんと寝転んでみた。い草の青い香り。ふわりと鼻をかすめた甘い香りに視線をやると、ハンガーにもかけられず床に落ちたままの海未ちゃんのパーカーが一枚。手繰り寄せてみると、海未ちゃんの香りが染み付いているような気がした。
「あ、ボタンほつれてる」
洗う前にほつれを直そうとして、忘れてしまったんだろう。
蒸し暑いぐらいの季節なのに、ひとりきりの部屋はなんだか肌寒く感じて、海未ちゃんのパーカーを羽織ってみる。背丈が一緒のことりたちは服のサイズがピッタリとあっているはずなのに、このときだけは何故か妙に袖が余ってしまった。

案外洋服には頓着しない海未ちゃんのことだから、ワンサイズ上のものを買ってしまったのかもしれない。

急に視界が、暗くなった。

「わ」

「穂乃果みたいに、何をしてるんですか」

「んー……」

パーカーのフードを後ろから被せられたようだった。フードを押し上げて見上げると、頬を微かに赤らめた海未ちゃんがはしたないですよと袖を引いた。

「ことり、その服は、洗いますから」

「うん」

「……洗うのですか」

「うん」

「なんで離さないんですか」

「なんとなく？」

「あなたはライナスですか」

苦笑した海未ちゃんがパーカーを剥ごうとするけれど、いやいやと首を振るとそれ以上は触れてこず、ただ浅いため息が返ってきた。

「ことり」

「や」

眉を寄せて、困った顔。

いつも海未ちゃんはそうだった。突き放さないかわりに、それ以上近寄りもしない。

付き合ってほしいと懇願した時も、そばには寄り添ってくれたけど、抱きしめてはくれなかった。キスだって本当に一瞬かすめるだけのものしかない。恥ずかしがり屋の海未ちゃんなんだから、それで満足しようって、できるっておもってたのに。にんげんって、知ってしまったら欲張りだ。

「ねえ。ことりに触れるの、すきじゃないでしょう？」

「こと、……」

はっと息を飲む音がした。

「いいよ、無理しなくて」

「そういうことではありません、ことり。誤解です」

「じゃあ、どうして」

どうしてさわってくれないの。

畳についた大きな手に手のひらを重ねてみる。微かに震えたような気がした。

見上げると、目を泳がせた海未ちゃんがわなわなと震えて、唇を戦慄かせて。

「そういうことを言われてしまうと、がまん、できなくなってしまいます」

さまよっていた瞳が、なにか覚悟を決めたように、ことりをじいと見ドろしていた。

大きなワンちゃんが目の前の好物にかぶりつくように。海未ちゃんに、噛み付かれる。

がちり、とぶつかった歯が、唇を微かに切った。わずかに顔をしかめながらもそれでもぬめる血を拭うように何度も何度も触れてくる。歯列を喉奥を弄られる。やわらかな感触と甘い痺れがじんと、響く。苦しくなって顔を逸らしても、執拗に触れてくる。一度スイッチの入ってしまった海未ちゃん

を止められる術なんてどこにもなかった。
「ことり」
恥ずかしくなって顔を腕で覆えば、どけてください、と言わんばかりの声。いやいやと首を振ってゆるい抵抗を続けていると、するりと太ももに這う指先。
「つみ、ちゃ」
「ほら、ことり？」
顔をみせて、と薄く笑う。
ちょっとしたふれあいですら顔を真っ赤にして破廉恥ですって怒る海未ちゃんはどこへ行ってしまったのだろう。
「だって、ことりには知られたくありませんでしたから」
こんな、浅ましい衝動を。
するりと絡め取られた手で導かれた先には、海未ちゃんの熱がはっきりとかたちを表していた。ことりや穂乃果ちゃんにはなくて、海未ちゃんと絵里ちゃんにはある、それ。小さい頃こそ一緒にお風呂にだって入ってくれていたのに、やんわりと断られるようになったのはいつからだっただろう。海未ちゃんから触れなくなったのは、いつからだっただろう。どうしてなんて、もう、考えるまでもなくて。ますます顔を見せることなんてできなかった。
「触ったらがまんなんてできないって、思っていましたけど。やはり未熟者です」
顔を隠したままの手にかぶりと噛み付かれ、感触を何度か確かめられる。むず痒いような感触に指先を開いたり閉じたりしていると、そのまま腕を掴まれて、解かれた。
「……なんて顔をしてるんですか」
「……い」
「？」
「ひどいよ、うみちゃん」
こんなのってない。
「ことり、海未ちゃんはそういうこと、きらいなんだって、おもってた」
「……その、得意では、ありませんけど。人並みに、興味だってあります。ことりが裁縫している時の白魚のようなその手だとか、柔軟の時の柔らかでしなやかな足だとか。いつだって触れてみたいって」
「……海未ちゃんにさわってもらうの、やだ、」
「えっ」
「……だってうみちゃんこんなふうに、さわったりしないもん。やだ、こんなの、……はずかしい」
熱に浮かされたような言葉に、視線に、かあっと耳まで熱くなっていくのがわかった。視線をそらしたところで、低い、熱のこもった声が、響いた。
「――――ことり、」
「うみ、……ちゃん」
「かわいい……です」
「やだ、もう」
「ことりはかわいくて、きれいですね」
「そんなことないもん。海未ちゃんのほうがきれいだし、指も長いし、からだも」
「きれいです」
海未ちゃんはそう言って、覆いかぶさってくる。
「やだ、うそ」
「たとえばことりの膝のかたち、すごくきれいで、すきです」

「きれいじゃないよ」
歩き方こそ治ったけれど、筋肉だってうまくつかなくてただ細いだけだし、うっすら傷跡だって残ってる。
「華奢で、きれいですよ」
重ねていった海未ちゃんは、ちゅう、と唇を落とした。感覚だって鈍くなっているはずなのに、ぞわり、悪寒に似た感覚が走った。
「すきです」
さらさらの髪だとか、蜂蜜のような色の瞳だとか、かわいい手とか、きれいな足とか、細くて華奢な腰とか、ぜんぶ。
「背格好は似てますけど、こんなにも違いますね」
ほら、と手のひらと手のひらを合わせて、指先を絡めてくる。関節半分違う長さ。そして空いたもう片手でするり、シャツの裾から皮膚を撫ぜた。スカートのフックを器用に片手で外して、ぺたんこのお腹や骨の浮いた腰骨のあたりを何度も擦る。
「っ、……」
「スカートのサイズは一緒のはずですけど、骨の作りが華奢なんでしょうか、やっぱり」
確かめるように触れる指先が、熱かった。
「うみ、ちゃ、……っ」
「……触れるのが、こわかったんです」
だってことりをこわしてしまいそうで。
でも。
疑われるぐらいなら、離れていくぐらいなら、いっそ。
「いいですか、ことり。しっかりと、わからせてあげますね」
興奮に深みを増した剣呑な琥珀が、ことりを射抜いた。

執拗に胸の先の蕾ばかりをついばんではかじりついていた海未ちゃんが、ながくてきれいな指先でぬかるんだそこに触れてくる。
ぐじゅり、濡れた音が響いて、ぎくりと体をこわばらせた。
「……ことり」
痛いぐらいに腫れ上がった芽を、蜜に濡れたながくてきれいな指先がくすぐると、とたんに力が抜けて柔らかく溶けていってしまうのがわかった。
「は、……ぁ、っあ、やぁんっ……」
「ん……」
柔らかくくすぐる指先にうっとりと熱い息を零しながら蕩けたことりを見下ろして、海未ちゃんはスカートを持ち上げるほどに猛る熱をするりと取り出した。すっかり潤んだそこに押し当てられると、じくりとした痛みが、はしった。
「っい、……痛、……いよぉ……」
「ん……だい、じょうぶです、まだ、いれませんから……」
くすぐっていた指を離して、両の手がしっかりと腰を掴んだ。海未ちゃんの体が太ももを押し広げて、膝裏を肩へと抱え上げる。
「……やっ！うみちゃ、こんな、……やだ」
「……は、……っっは」
ぽたりぽたりと汗を零しながら海未ちゃんが、深くことりの体を折りたたむようにして覆いかぶさって。芯を持った、熱い熱いその欲望で、芽吹いた蕾ごと浅いぬかるみを揺さぶった。
「んん……っ！……あっ、ぁん、……や、あ、っ……ふぁ、……い、っ」

「ことり、……はぁ……ふ」
撹拌するひどく粘着質な水音が、唇からこぼれてしょうがない甘ったるい声としんとした空気に混ざって、溶けた。
「……み、ちゃ、うみちゃ……ぁん」
あまくなくと、海未ちゃんはそのたびに唇を寄せて、ちゅうと吸い付くようなキスを落とした。
しびれが広がって、ひくりひくりと震えるのが、わかった。
「いいですよね……」
何度も何度も海未ちゃんが触れて、確かめて。
浅いところを探っていたそれが、ついに押し込まれた。
「ことり……は、やわらかいですね？」
「……やぁ……っ！」
「こわしてしまいそうでこわかったんですけど、こんなにやわらかいならきっと、大丈夫ですね？」
「や、……ぁ、……う、……ひっ」
かたくて、大きくて、こわい欲望が、まるで海未ちゃんとはかけ離れていても。
「ことり、……受け入れて、」
震える喉に唇を押し当ててそう、海未ちゃんに懇願されたら。ことりが海未ちゃんを受け入れないはずが、ない。
思っていたよりもずっとずっと質量を持ったそれが、深くを抉った。
「……み、ちゃ、……やぁ、ああぁっ、あっ、やだぁ、……」
じんじんと痛みがはしるけれど、お願い、許してとどんなに泣いてもお願いしても海未ちゃんは抜いてくれない。ぐずぐずに溶けきったことりの中を掻き乱して、すっかりかたちを覚えきってしまうまでゆっくりと、けれど執拗に押し開いては揺さぶった。
「……はっ、ぁ……」
かすれた甘い声が、耳朶をくすぐった。急にその艶やかな声にぞわぞわ、する。お腹の奥がふるえるような感覚。かあっと芯が熱くなるような錯覚。痛いばかりだったはずなのに、こんなの、おかしい。
「……い、うみちゃ、……こわいよぉ……っ」
ぐずぐずと泣きながらその背に腕を回してぎゅうとすがりついても、空に一人放り出されたような不安定な感覚が襲い、途方も無い不安が湧き上がる。
「……じょうぶ、です、大丈夫ですから、ことり、もっと……っ！」
それまでゆっくりと開かない扉をただやさしくノックしていた海未が、急に乱暴にこじ開けるように、深くを叩いた。
いっかい、にかい。
さんかい。
「……っ！……か、……はっ」
息が、できない。
「……ことり、ことりっ」
極度の緊張にピンと伸びていた足首を掴まれて、開かれて、ぐうっと、押し込まれて。がつんと、頭をなぐられたような、衝撃。
「やぁっ、ああ、あっ……ぁっ、あっ……！……みちゃ、うみちゃぁん……っ」
「……っ！」
お腹の奥が熱くなるような、感覚。侵されていく。満たされていく。

ぶるぶると震える海未ちゃんからこわくなるぐらい際限なく注ぎ込まれる、甘くて苦い、蜜。

「……き、……ことり、……は、すきです、こと……はっ、ぅ……はぁ、」

ゆるゆるじゅくじゅくとかき回されて、最後の一滴まで注いだ海未ちゃんは満足気に深く深く、ため息を付いた。

ずるり、湿った水音でもことりを侵しながら海未ちゃんが離れていくのがわかって、言うことを聞かない体がそれでも離れないでとでもいうように、無意識にぎゅうと締め付ける。

「……っ、あ」

ふうふうと呻くような吐息が、胸をくすぐった。先ほどまでの乱暴さも忘れてやわらかくなった海未ちゃんが、また鎌首をもたげたのがはっきりとわかってしまう。熱くて硬い、それで。

かあっと、熱がこみ上げてくるのがわかった。

汗や涙でぐちゃぐちゃになった顔を覗きこんで海未ちゃんが、微笑った。

「……やらしい、顔」

涙に濡れた眦に唇が落とされて、ゆるゆると揺らされると、無意識にきゅうきゅうと吸い付いて、震えてしまうのが嫌でもわかってしまう。

「……っひ、……ぅ」

「ことり」

「……も、むりぃ……」

狂おしいほどの熱が、ずるりと吐き出される。だらしなく開いてじんじんとひりつくような痛みとそれ以上の何かを訴えるそこから、追うようにどろどろと海未ちゃんがことりの中へたっぷりと注いだ白い蜜が溢れて、伝っていくのが見なくてもわかった。

「ことり」

こくり、と喉のなる音がした。

くるりとうつ伏せにされて腰を高く上げさせられても、ちっとも膝に力は入らなくて崩れ落ちてしまう。もどかしげな様子で海未ちゃんはそれでもことりに覆いかぶさって、いつものやさしさなんて欠片も見せずに大好きなその手でぐいと腰を引き寄せて、再度その熱で貫いた。ずうっと深い、深い、ことりのしらない最奥まで暴くように。

「……ひ、……やっ、ぁああん……っ」

「……ふっ、あ」

「っあ、あ、……く……んっ……ぁ」

ぎゅうと広げられた海未ちゃんの服を掴んでも、甘く啼いても、前後不覚に陥ってしまいそうな怖くなるほどの浮遊感はちっとも逃げてはくれない。

肩甲骨や背中にうっっ血した噛み痕が残るほど何度も噛み付かれても気づかないぐらいには、頭のなかがぐちゃぐちゃにかき乱されていた。

「うみちゃ、うみ、……やぁ、ああっ……んっ」

「――っ！」

頭のなかが何もかもわからなくなるぐらい白く濁るまで、何度も何度も、海未の白濁を注ぎ込まれた。

目が覚めると、目の前にきれいなかおが、あった。

ことりをまるでお気に入りのぬいぐるみか何かのように、しっかりと腕の中に抱え込むようにして眠る海未ちゃんの目鼻立ちの整ったきれいな顔立ちは、お人形さんのようで。小さな頃からのお気に入りだった。

抜けだそうにもしっかりと背中に回った腕は解ける気配がない。

寝付きの良い海未ちゃんは同じように目覚めもいいのかと言ったら、そうでもない。けれど無理に起こそうとすると恐ろしい報復が待っているので、大体はそのままじいっと、寝顔を見つめながら自然と起きるのを待っていた。今日も、そうしようと思ったのだけれど。

不意にこみ上げる衝動から、かぷりとその鼻先に噛み付いてみた。

「んっ」

唐突な鋭い刺激にゆるゆる押し開かれる琥珀色の瞳と、目があった。すっかり興奮は収まったのかいつもの淡い色をしていた。

「……こと、り」

ふにゃり、嬉しそうに微笑ってちゅう、とひとつ。甘いキスをくれた。

「……っ」

「……くぅ……」

そしてまた、眠りに落ちて。

怒られなくてよかった、よりも。

海未ちゃんがすっかり、こんな風になってしまうなんて思ってもみなかったことりは、その腕の中から抜け出すことも かなわずに、深いため息を付いた。

相原 / 絵里×ことり

Aihara/Eri×Kotori

遅くなっちゃった

は――

でもテストもレポートも終わったし

ピョン

ちゃんお疲れ様
ことりもテスト
おわったよー
はやくあいたいね♥

会いたいけど

ことりも疲れてるだろうし

がまん

ガチャ

ただいま

あ

えりちゃんお帰り

ごはんたべる？
シャワーあびる？

それとも
ことり!?

なんで…
ていうか
時間っ

え?

え?

あー…
じゃなくて
言ってくれたら…

えりちゃん
おちついて?

えっとね
えりちゃん
忙しそうだったし
帰りも
遅いかなって
思ったんだけど

会いたくて

えりちゃん
やだった?

嫌なわけないわ

会いたかったもの

良かった

あのね

ことりごはん作ったの

あと

えりちゃんの好きなガトーもあるから

一緒に食べようね

しっかりしなきゃって思うのに

なんだかすっかり甘やかされるんだもの

だってそれは

ことりはえりちゃんのこと甘やかしてますから

え、ええ…？

どうして…

えりちゃんはすぐ頑張っちゃうから

ことりが甘やかして

ふにゃふにゃにしてあげないと

ね

っ……

ううん

それとも…

じゃあごはん食べる？

先にことり

え

えりちゃ

…うん

エプロン…どうしようかしら

へ？

なんかそれ…

おじさんみたいだよ…

おじっ!?

ガーン

違うのよ!

だって

制服とか最近見てないからなんかこう…!

まぶしくて…

もー しょうがないなあ

ことりはえりちゃんに甘々ですから

どうぞ

めしあがれ

くちゅっ

……っ

ん……

すると…

ふ

ちゅ

ちゅ

は…

ます

やっぱり…

ちょっと

脱がしにくい…

いい？

ん？

ぬげた…？

ん

下、もう平気？

…んっ

ぬるぬる…

おく…

いい？

あっ

ぷ…っ

っ…は

ん…りちゃ…

あ…っ

くちゅ

やっ

くちゅ

ビクッ

や…え、りちゃ

ぐちゅ

ま

ぐちゅ

あ…っ

やだ？

いたい？

ち、が…

も…

は…くえりちゃ、の…

お、ねが…い

っ…

…わかった

ブンッ

ぷ…

ん

…っ！

ビクッ

やっぱり…

久々だし
もっとちゃんと
慣らさないと

だ

だい…
じょぶ

だって
ことり

すき…
だから

甘やかすのが？

も…、と

ことりで
きもちいい
えりちゃん

かわいくて

すき

……っ

くらっ…

ああもう

甘くてあまくて
どこまでも
とけそう

手加減しないから
覚悟して

んっ？

shake on!

Love Live!　Girls love Anthology

R18 Adult Only

発行日	2015年6月21日
発行	軽トラ。
印刷	(株)栄光印刷
執筆者	相原　@neutrin
	北村 透　@tooru1001
	秋太郎　@syutaro
	ぶん　@bun_0004
	抹茶 リトロ　@kotorinooyatu

本書の複製複写、転載、オークションへの出品を禁止します。

Aihara/ErixKotori
Kitamura Toru/HonokaxNiko
Syutaro/MakixHanayo
Bun/ErixKotori
Maccha Ritoro/UmixKotori